
青い月の下で：夢幻螺旋

渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い月の下で：夢幻螺旋

【Nコード】

N6416Z

【作者名】

渚

【あらすじ】

夏の焼けつくようなある日、「彼」は幻想へと足を踏み入れた

少年はかつての思い出を取り戻すために記憶を辿る。

廃墟で見た幻は形を成して子供へと姿を変えた。

逃げる子供は知らない世界へと少女の手に導かれ、

真実を追う少年は堅牢たる屋敷の前へ、

運勢は逆転し、彼らを取り囲む風景は夢のように移り変わる。

対極する二つの世界、終わらない螺旋。

この世界は現実なのか？それとも誰かの見た夢なのか？

0、？ 陽炎の中（前書き）

この物語は「青い月の下」という私が「四季風」というサークルで作っているノベルゲームの外伝です。原作者の私が書きました。しかし、そんなゲーム知らないよ！といっても全く問題ありません。なぜなら、この外伝は本編とはほとんどつながりが、ない！のです。一応外伝なので本編とつながっていますが、最後の最後まで読まないとわかりません。世界観は同じですが、雰囲気は180度違います。なので青い月体験版をプレイしたことない人でも一つの完結した別の物語として楽しめると思います。そして、外伝読んだから本編もくとプレイしていただくと、あーこんなふうになったんだと気付いていただける？かも。ノベルゲームに興味がある方はぜひぜひ！

四季風ブログ http://ameblo.jp/shikina_gi/

もし感想がありましたら小説家になろうのユーザーさんの感想は下のフォームに、それ以外の読者さんはブログのコメント欄にお願いします。

真つ暗な場所をぼくはずっと走っていた。光りはどこにも見えず、行っても行っても闇しか残らない。そこはまるで明かりのないトンネルのよう。そのうち、ぼくは気付いた。ここは明かりがないんじゃない、たぶん何も無いんだってことに。周りの何もつかめないし、トンネルのように走る音も反響しない。気を抜けば、飲み込まれてしまいそうな暗闇。あるのは息をきらすばかりの全力疾走。そして、彼女を呼ぶ声。

「お姉ちゃん！」

けれど、返事がない。その代わりに聞こえるのは男の声だ。後ろから前から、一体どこに居るのかわからない声の反響。それは不気味でぼくをいつそう脅えさせる。しかも、その声は一体何を言っているのかぼくにはわからない。帰れ、わかるのはその言葉だけだ。帰れ、帰れ、帰れとひたすらばかりの心を痛みつける。心がきしむ。

『この闖入者 』

『あの子は帰った。君も行け 』

いやだ。痛みをはねのけ、全力でそう応える。こんなところで終わりたくない。彼女に会いたい。絶対に会いに行くんだ！

声に向かってそう叫ぶ。いや、叫んだはずだった。それなのに、想いは声にはならず、かわいた叫び声が頭の中だけでこだまする。

『いい加減に』

それでも聞こえたのか声はいらだち、より強く声が響き渡った。

『もともと君の方から、この世界に迷い込んだんだ』

そんなのぼくは知らない。この世界がどこかなんて知るわけない。ただ、ここはぼくと彼女が一緒に歩いた場所だ。

『なら、知らなくて構わない。力を抜き、眠るように去れ。そして、忘れてくれ』

いやだ。絶対にしないと叫ぶ。ぼくは彼女を探して、また会いに行く！

「つて、あ」

声の反響が止まったその時、ぎしりという音が顔の真下から聞こえた。とっさに視線を下に、いやだめだ。首が動かない。だれかに、両手で首をしめ

「いた、い」

思考が止まる。苦しい。手をはなせ。息が、できない。

体をそらし、自分の手を前へと伸ばす。かすむ眼の前は真っ暗だ。誰の姿も見えない。けれど、いるはずだ。彼女をさらったやつが。ゆるさない。でも、その前に手をどける。

もがき続け、手を振りあげる。しめつける相手からはなれようと、
だけど、届かない。振り乱す。届かない。ついに手は空をつかんで、
だらりと下がる。動かない。もう動かない。

だめだ。死んでしまふ。助けて、お姉ちゃ

？

「夢か」

形のない悪夢を見ていた。片手で顔をぬぐい、ゆつくりと息をは
く。そうして、あたりを見回すとさつきと全く同じ光景が広がって
いた。どうやら一瞬だけ気を抜いたせいで、少しだけ意識が飛んで
いたみたいだ。背にしていた木から離れて、再び熱気の中へと戻る。

「ふう……はあ」

それはうだるほど熱い夏の日だった。コンクリートの路面からは
陽炎が立ち昇り、日差しは眩しく、しかし目を背けたくなるほど溢
れている。まっすぐ届くはずの光の線は歪んで今見ている視界が現
実とも幻とも区別がつかない。

そんな世界に僕は立っていた。歪んだ視界に立っている場所は揺
れているような気がするのに、そうじゃないのは足だけはしっかり
と地についているからなんだろう。ここは街のはずれ。住宅街とも
駅近くの活気溢れる商店街とも程遠い寂れた場所だ。眼の前に広が
っているのは荒野、枯れた雑草の群れ。伸び放題になった木々の奥
に見える小さな廃墟。僕の後ろにはビルがいくつか建っているもの
のテナント募集の看板しか窓には掲げられていない。ただの廃ビル
同然、ここにあるのはそれだけだ。

まるで、何も残っていない。

僕は廢墟の前にまで歩を進めると、ゆっくりとその全体を見た。そんなに大きくはない平屋。壁は風雨にさらされたおかげで黒く汚れ、至るところが剥がれ落ちている。それと反対に扉は壁にはめこまれたように今もまだしっかりと付けられていた。取っ手に手をかけても、びくともしない。もう、ここに棲みついていてる者もいないだろうに、今もまだこの家を守っている。いや、あるいは、

「このまま腐ってしまったのか」

少し離れて扉を蹴り飛ばす。それを何度か繰り返すと、見かけ倒しな音がして二つに割れた。思ったとおり、歪んだ壁のせいで動かなくなっていただけだった。本当は不法侵入なのを無視して中に入ると、ほこりの臭いが鼻を襲う。張り巡らされた蜘蛛の糸を手で払いのけながら部屋の真ん中へと進むと家具がそのまま残っていた。古いテーブルに椅子。そして、周囲の棚。それ以外に特に目立つた物が見つからないのは何もないのでなく、何年もの間に積み重なったちりのせいだ。

視界は不十分なくせに、おまけに壁に空いた穴から光が差し込んでいる。きらきら輝いて、なんてミスマッチ。汚さをより鮮明にするだけだ。僕が思う廢墟の雰囲気とも夏の明るさとも全然違うズレ。これなら外にいるのと大して変わらない。この熱さも。歪んだ視界も。どんよりとした空気を払う気もなく、ただその場に立ち尽くす。汗の雫がほこりまみれの床に落ちた。僕の脳裏に早くここを出たいってという言葉がよぎる。もともと、ここに来たのに別に目的なんてない。意味のないただの寄り道だ。ああ、そう、それだけはあるのと全く変わらない。

「入ったことは覚えている。問題はその後だ」

かつてここで何かが起きた。そのことを僕は知っているのに、あの時にあつた記憶がぼんやりとしている。今日ここに来たのはそれを正確に思い出すためだった。けれど、奥に入れば入るほど、「何もなかったのかもしれぬ」という思いが増してくる。ただ、僕はこの近くを通りがかつただけで夏の暑さに当てられただけだったとそうして夜目覚めるまでここで倒れていただけなんだと。そんななんでもない話なのかもしれないという思いは決して嘘じゃない。誰かに会つたのは知っているけれど、それが誰なのかさえ僕には曖昧なんだ。その次の日にここに来たけれど、その時からこの家はもぬけの殻だ。

ため息をついて、ゆっくりと眼を閉じる。

ここを出たいという心の声を殺して、僕は立つたまま自分自身に問いかけた。ここに来た理由と今からすること。それをちゃんと言葉にし直して僕に投げかける。昔会つた誰かがそう僕に教えたように。

まずは自分一人で思い出すことだ。これはきつとある夏の日の思い出、とかそんな内容の話じゃない。今では陽炎のように不確かな幻燈のお話、僕が僕である前のことだ。ただ、一つ覚えておかないといけないのは、僕だけの主観だと真実と違う点がある。だって、覚えていないからだ。もう一人誰か関係のある人がいないと話にならない。二つ目はその人を探すこと。……一応、どこにいるかはわかってはいるはずだけど。

眼を開けた瞬間にプリズムまき散らす光の中、奥の扉へ誰か子供

が駈けだして行くのを僕は見た、気がした。いや、こんな世界じゃそれが幻か現実なんてわからない。ただその後を追いかけたくなっただのはきつと気のせいじゃないだろう。

汗がまた落ちる。さあ、そろそろ始めよう。

? 林、そして……

?

ぼくもまた夢を見ていたような気がした。

ぼーっとした瞬間、突然視界が真っ暗になった。

「うわぁー！」

あわてて目の前を両手ではらう。すると、何かがぱさりとした音を立てて頭から落ちてきた。よく見ると何枚もの葉っぱがついた折れた枝。偶然落ちてきたみたいだけど、クモの糸よりは少しマシな気がした。

って、そんなことより。

頭を一度大きく振って眠気を追いはらう。そして、すぐにもう一度かけた。

周りにあるのは青々とした林。とても高くそびえていて、その枝と葉っぱで空が見えなくなっている。さっきまで明るかったのに、ここではまるでもっているみたいだ。暗くて、なぜかじめじめとした空気。

その時、

「はっー！」

後ろでがさつとした音がして、ぼくは走るのをやめてすぐに振り向いた。けれど、そこにはうつそうとした茂みが広がっているだけで、誰かがいるような気配もない。ぼくを追いかけてきた人もだ。細い木の間にも何にも見えない。

「今度はなんだよ……」

落ちつこうと胸をおさえる。すぐにまた走ろうと思ったけれど、足が動かなかった。

そういえば、こんなことは前にもあった気がする。あの時は確か、
、そうだ。

そばに落ちていた枝をつかんで、ぼくは後ろへ下がった。誰かが隠れていてひどい目にあったトラウマがよみがえる。それならいつそ出てきてくれた方がいい。

だけど、そうすると体がふるえる。だって、こわいんだ。

何の音もしない茂みにつつくようにして、枝を向ける。慎重に、耳をすませて聞き取ったのは、なんでもない枝と葉っぱが触れ合うかわいた音だった。それ以外に出てきたものはない。ぼくはすぐにそこから離れて、今度はそろそろとあたりを歩いてみる。けれど、人どころか小さな動物さえもいなかった。

「なんだ……」

一気に力が抜けたような気がして、そばにあった切り株に座りこんだ。そのまま深いため息。

「いなくてよかった……」

今までずっと誰かがぼくの後を追いかけていた気がしていた。振り返らなかつたから本当についてきたのかはわからなかつたけど、その人はさつきぼくが会つたような人にも思えて怖くてここまでずっと逃げてきた。何が怖かつたかつて、彼は何かよくわからない言葉を言つてぼくをおどしてきたから。確か、ぼくのことを……不幸を呼ぶ者、それで、帰れつて言つて。まるで、あいつらみたいに。いや、あいつらだつたのかな。なぜか走りだした時のことが今もまだぼんやりとしている。

「はあ……だめだ、だめ」

もう一度頭を振つて、今までのことを追い払う。とにかく今はもう大丈夫なんだ。後はもう会わないようにして帰るだけなんだから。いつもと同じ。そう、いつもと同じだ。

何度もそう思いこんで枝をわきにおく。そして、ランドセルを降ろして両手で抱えた。その表面にいくつも貼られたニコニコマークのシール。こうして見ると彼らが僕に向かって笑いかけてくれるように感じる。こうして見るのがぼくのくせで、なぜかほっとする。

「あ、そういえば……」こつてどこなんだろう」

ぼくは逃げるのに必死で、どこに行くのか気付きもしなかつた。

周りを見回しても、林だけでその向こうに知っている街は見えてこない。ぼくの街にはこんな深い林はないから、きつと街の境だ。隣街との間。こんなところまで逃げてきたおぼえはなかつたんだだけ。

「まあ、いいか。このまま隣街まで行っても夕方まで時間はあるんだし」

ランドセルを背負い直して、歩いてきた方とは逆の方を見る。林は続いているけど、目をこらすと何か向こうにあるのが見えた。行ってみよう、そう思った時だった。

バキッと何かが折れる音がした。

「よう、チビ」

聞きたくもない声がして振り返る。すると、茂みの向こうから3人の男の子たちが歩いてきていた。道に落ちている枝を踏み折ってくるその顔、その声は、

「う……わっ」

気のせいじゃなかった。本当にいた。ぼくと同じ年頃の悪そうな顔をしたアイツら。

ランドセルをすぐに背負い直し、再び枝を手に取る。そんなぼくの様子を彼らは面白そうな眼で見た。にたにたと笑いながら、

「なんで、お前がこんなところにいるんだよ。ここはお前が来るよ
うな場所じゃねーぞー」

「き、君たちこそ、なんで。学校は!？」

すると彼らは一瞬きよんとして、顔を見せあう。だけど、すぐ

に「あはは！」と軽い笑い声を出した。

「まさかお前、今日学校あるって思ってたの？ バツカお前！」

「ほんとにいるんだね、こつこつやっ」

「なあ、今日が一体何の日だったけー？」

じりじりと近づいてくる彼らを前にぼくははっとした。

そつだ、今日は祝日だ。確か海の日か何かだった気がする。昨日も一昨日も学校に行かずに時間をつぶしていたせいで何の日だか全然わからなくなっていったんだ。しかも、今日は寝坊して飛び出して……。お母さんも気付いていればよかったのに！

「で、どうしよつか。今日は僕たち、アイツに会う予定なかったけど」

「んー、でも向こうは杖持ってるし。ってことはやる気ってことだし。おまけに、こっちは二日くらい何もしてないからストレスたまってるしー。とりあえず一緒に遊んでみよ？」

その言葉の後に低く「なぐって」って声が聞こえた。直後に賛成、と勝手に3人が決めて走りだす。

ああ、もう！ ついてない！

すぐにその場から飛び出し細い木の間を走り抜け、木の根っこを飛び越える。そのまますぐに別の木と木の上に飛び込んで、右往左往を繰り返す。3人から逃げるため、これがぼくがあみだした逃げ

方だ。

「ちよろまかと！」

ヒュン、と音がして、頭の上を何かが通り過ぎた。当たらない！それはぼくの目の前の木にぶつかり、どこかへとはね返る。

ただ、それに一瞬、目を向けたのが失敗だった。

飛んできたものが石だと確認したその瞬間、足に何かが当たり、ふわりと自分の体が浮いた。あ、しまつ　と地面が真上になった瞬間、ひどい痛みと一緒に倒れて転がった。叫ぶ間さえない。

「いてて……」

腕をついて起き上ると服は土で汚れて、おまけに膝がすれて血が出ている。涙がにじんでぬぐうと手の甲までもが真っ茶色だった。

「あーあ、つまずいたよ。バカだなあ」

「オレらから逃げるから」

軽い足音に目を向けると彼らがゆっくりと僕の前まで歩いてくる。距離は思ったほど離れてなかった。すぐに枝を取るも、それはもう転んだ時に折れて真っ二つになっていた。

「おら」

反応する間もなく、なぐられる。右のほおが痛い。そして、髪の毛をつかむと顔をぼくの目の前まで近づけてくる。

「ほら、早く立てって。それともマザコンのお前は一人で立てないんでちゅか、ついて！」

そのにやけた顔に精一杯の力でけりを入れた。血の出た片足で、だ。ぼくだって、そんなすぐにやられるわけにもいかない。吹き飛んだ彼を無視して、もう一度立ち上がると、またすぐに走りだす。けれど、今度は背中に飛び付かれた。

「何しやがる！」

振り向いた瞬間、顔を土色にした彼になぐられ、そのまま突き飛ばされた。

再び、地面に転がるべく。その時、べちゃりという音がした。

「……え？」

倒れた先の地面がぬかるんでいる。顔をあげるとそこは泥が混じった水たまり。なんで、と空を向くとそこに林はなかった。暗い雲から細かい雨が降りしきっている。

「そんなバカな……」

あいつらが「あーあ、きたねーの」なんて言う声が聞こえる。けれど、それよりも今はさっきまであんなに晴れていた天気雨が雨に代わっているのかの方がなぜか気になった。夕立ち？ 正午にもなっていないのに？

目を泥のついてない手でこすって横を見ると、3人がゆっくりと

こっちに向かつてきていた。そのうちの一人は顔を真っ黒にして本気で怒っている。後ろの二人はさっきと同じだ。にたにた笑って、きつとぼくと彼のやり取りを見物する気なんだろう。雨が降ってることなんて気にしていない。一方、ぼくは泥から脱出しようとするのに精一杯だ。それに、もう逃げられる気がしない。これもいつもと同じだ。ぼくには彼らに勝つことも、気力さえもわかなくなってしまう。

もうやめよう、できるだけ防御してやりすごそうとあきらめかけたその時、

「ねえ、君。やってて楽しくないでしょう？」

全く違う方向から声がした。それから一瞬の間もなく、何かがいじめっ子の頭に当たって彼が泥の中に倒れた。

「楽しくないなら、こっちに来なさい」

はつとして見れば、ぼくから少し離れたところに一人の女の子が立っていた。ぼくよりも大人びた、白いブラウスを着た子。よく見るとその奥には石造りの家があった。その門を開け、こっちに来いと片手で仕草している。

さすがにそこまでされてあきらめるべくじゃない。泥の水たまりからはね起きて、一気に走りだした。彼女の方へ全力で走って、門の中へと飛び込む。後ろから彼の努号が聞こえたけれど、無視だ。彼女は入ったのを確認すると門を閉めるなり、ぼくの手をつかんだ。

「や、早く！」

汚れた手なのを気にせず強い力で家の中へと引きこんでいく。ほく自身の体が浮くんじやないかと思つた時、ふつと彼女の横顔が見えた。一瞬だった。それは、こんな時に思うことじゃないなんてわかつてる。でも、それはとてもきれいな顔だった。それ以外に表わせる言葉をぼくはまだ知らなかった。

？不思議な少女

？

ボタン、とドアが閉まったのと同時にぼくは手を離された。「あ、ちょ」っとなんて言う暇もなく床に落ちて、また痛みが背中からおそってくる。

「いてて……」

つくづく今日はついてないと思ったけど、そんなことは後回しだ。ぼくはすぐに姿勢を正して周りを見回す。そこは家の玄関にしてはとても広い場所で、豪華なじゅうたんが広がり、きれいな壁や床が見えた。あれは普通の石じゃなくて……ええと大理石って言うんだっけ？

「どうしたの。こっちに来ないの？」

ふんわりとしたやさしい声。それにはっとして顔を上げるとさっきの女の子がぼくから少し離れたところに立っていた。改めてみると、そのきれいさにまたびっくりする。ぼくより何才違うんだろう、同じ年の女の子よりも少しだけ大人びた顔立ちに肩までかかったショートヘア。それに白い。服だけじゃなく、そこからのぞく腕と手や顔も人形のように白かった。

「あ、え……ぼく今汚れてるし」

一方のこっちは泥や土でひどい有様だ。すぐそばに大きな鏡があるけど、それを見なくてもよくわかる。

「そう……そうね。わたしも汚れたまま歩く人を見たことも本で読んだこともないわ」

彼女は自分自身に言うように不思議な言葉をつぶやくと「ちょっと待ってて」と奥へと消えていった。その軽い足取りを見ながら、ぼくははたとさっきの三人組のことを思い出した。そういえば彼女がドアに鍵を閉めたのを見てない。彼らが怒って入ってくるんじゃないかと思って、自分のランドセルを前にして抱きしめる。だけど、なぜかドアの外からは何も聞こえなかった。彼らが何か言う声も暴れる音も。

後ろを落ちつかずに見ていると彼女が戻ってきた。

「一応、持ってきたわ。これで拭いて」

振り返って見ると、差し出されたのは濡れたタオルだった。これも少女の肌と同じように白い。ぼくはそれをつかむのをためらったけど、彼女がそのままじつとしたままだったから仕方なく手に取った。じんわりとした冷たさがてのひらに広がっていく。

「ねえ、ぼく何才？」

「じゅ、十才」

「ふうん。あの子たちとは友達？」

「え？ いや、」

一体どうしたらそう見えるんだと思った時、彼女はしゃがんでぼ

くと同じ目線に立った。その目はきらきらと輝いて　　つて、あれ？　と思つた瞬間、彼女はぼくのランドセルに手をかけた。そして、いきなり貼つてあるシールをはがし始め、

「ちよつ……！　何するの！」

ランドセルを彼女から奪つて取り返すと、大きなシールの一つが半分だけはがれて下が見えてしまっていた。そこにあるのは、

「切り傷……」

きよとんとした表情のまま少女がつぶやくように言った。

何なんだこの人。人の物にいきなり手を出すなんて、さっきのあいつらと同じじゃないか。それでも彼女は全然、悪びれずに、

「ねえ、見せて。どうしてそんな傷があるの？」

なんて聞いてくる。ぼくは隠そうとしたけれど、なんだか彼女を見ているうちにもういいやと思つてランドセルを目の前に放つた。

「あいつらにやられたのだよ。あいつらだけじゃない、ぼくをいじめてきたやつみんな」

彼らがいたずらしてぼくのランドセルに傷や穴をつけたのをシールでぼくは隠していた。お母さんにだつてばれたことないのに、なんでこの人は見つけてしまつんだらう。

「不自然だからよ」

聞いてもないのに彼女は言った。

「今までこれにそんなの貼っている小学生なんて見たことないし、貼り方がおかしいわ。とつても不格好」

傷跡をすつとなぞる。そうして顔を上げるとぼくを見て、また何も知らないような顔で、

「どうして怒らないの。どうして、やり返さないの」

「どうしてって……できたら、最初からやってるよ」

怒りたい気持ちをおさえて、ぼくは言った。そんなこと言われるまでもない。やったところで何も変わらないし、もつとひどいことになるのがオチだ。先生にも親にも言っても同じ。その時だけよくなっても次の学年になると、また違うやつがぼくをいじめる。

「わたしにはわからない」

「わからないなら、いいよっ」

視線をそらす。この苦しみを知らない人には絶対にわからないんだ。あいつらと同じだ。途端にぎりぎりとした痛みが体にうずき始める。いやだ、いやだ。ためこんでいるものが出てきそうだ。大体この人はいじめなんてものを見たことがないんじゃないか。だからさつきも友達かなんてことを聞いてきたんだ。

「人に会わない方がずつといい」

思わずそう声に出した。人に会わず、何も知らずに生きていく方

がずっと平和なんだ。

タオルで顔を拭き終わると真っ黒になっていた。

「そう……」

彼女は眼を細めて、軽いため息をついた。その少しだけうつろな表情に、しまった言いすぎたと思ったのもつかのま、

「わたしにはわからない。だけど、一つだけわかることがあるわ」

そう言っただけで突然立ち上がり、とんとんと足を軽く踏みならす。そして、ぼくを見て「ふふ」と笑みをもらった。挑発的な笑顔に思わずどきりとする。

「それが何かはまだ教えないけどね。でも、ぼくがそんなに一人がいいって言うなら、わたしと一緒に遊びましょう？」

「え？」

一瞬、聞き間違いかと思った。けれど、彼女は強引にぼくの手をまたつかんで、

「ほらほら」

「え？ え？ あ」

すぐにはらいのけようとしたりけれど、その前に体がバランスをくずして倒れてしまった。というか、自分でわかるくらい顔が真っ赤だ。うわああ、はずかしい！

それを彼女は全く気にせず、に玄関から床の上へぼくを引きずりだすと、そのままずりずりと連れて行き始めた。

「って、ぼくは一人がいいんだって！」

「いいから。いいから」

全然よくないし聞いてない。彼女は床が汚れるのも気にせず、ぼくはされるがまま。あやうくランドセルを落とすようになって、あわてて背負う部分を握りしめる。いろんな意味で必死なのに正反対に彼女は笑って、

「せつかくの機会だし、まずは庭がいいかしら」

そんな朗らかな声でつぶやいた。お嬢様のような声質なのに行動が全然一致してない。しかも、楽しんでいるのか鼻歌まで歌いだした。一体何でなのかわけがわからない。ぼくはもう何もできずに、ただ、

「変な人」

そう思うのがやっとだった。

？堅牢たる屋敷

？

幻を追い、林を抜けると隣街に出た。林を通っている間に天気が変わったのかさっきまでの焼けつくような日差しが完全になくなり、代わりに霧が広がっている。その霧の中を進んでいると大きな石造りの西洋風の屋敷が眼の前に現れた。その姿はまるでホラー映画に登場するような舞台を思わせるほど古く、けれど、決して壊れかけてはいない。むしろ、それはどこにも隙がないほど強固な威圧感があつた。

「さて……一体どうしようか」

幻はもう見えない。門の隙間から玄関をのぞいても、さっきの子供が通つていった跡は何も残っていない。ただ、玄関付近の壁の一部が切り取られている部分があることだけが眼にとまる。そこに書かれているのは、

「祁答院」

何て読むのかわからないけれど、ここが神社じゃない限りこの家の名字だろう。

「それにしても……不気味だな」

改めて屋敷を見ると、ここから見える窓には鉄格子がどれにもつけられていて中が見えない。ホラー屋敷もありだけど、監獄という言葉い方もふさわしいようにも思える。

それからしばらく周りを注意深く観察しながら歩いた。屋敷の隣にもちらほら家はあるけれど、さっきの廃屋と同じだ。寂れていて人が住んでいる気配はない。ここも街のはずれだし、どんな街かは知らないけれど、隣なんだし僕の住む街と大して変わらないだろう。塀沿いに歩いていくと次第に坂になつていく。丘に立てたのだから。林の方まで緩やかな坂が続いている。そのままひたすら歩いていくと霧は晴れる気配のないまま、元の正門へと一周してきた。

その途中、

「何だこれ」

打ち倒されたような古い看板が落ちていた。表面には何か字が書いてあるけれど、泥に汚れてしまってよく読めない。ただ、なんとなく『占い』という文字が読めた。そして、『予言』、『過去視』……？ 最後のつて一体何だ。

「……………」

ともかく、なんか見つけてはいけないものを見つけてしまった気がする。僕は見なかったことにして、板を元の位置に戻すと再び歩いて戻った。

とりあえず、わかったことはこの屋敷には余分なスペース、たとえば広すぎるような庭はどこにもないということ。ただの一区画を占めているだけの家だ。仮に屋敷の地下に隠し通路があつて、どこか別の場所につながっていない限りは。

ただ、それがなぜか変な感じがする。言葉にすることができないような、何かが違う違和感。

「おかしいな……」

曖昧だった記憶がまたぼんやりとしていく。あれが本当にあの時の思い出なのかわからなくなってきた。

「とりあえず、庭には行けないな。あつたとしても今の僕にはわからないし。それじゃあ……」

正門の奥、屋敷の扉へと目を向ける。どうするか少しだけ悩んだ後、僕は呼び鈴を探した。人がいるかいないか、いやいなくてもかまわない。ただ、何かがあるはずだ。

門の端に青銅色の小さな鐘を見つけ、それを鳴らそうと手を伸ばす。だけど、その時、

「っ！」

気配を感じて振り返った。すると、ここから見て一番奥、塀が曲がって見えなくなるその場所に女の子が立っていた。小さい小学生くらいの女の子。彼女は一瞬、ぺろりと舌を出して僕に見せると、すぐに奥へと隠れてしまった。

「待って！」

すぐに追いかける。なんでかわからないけれど、そうしないといけない。そんな気がする。塀を曲がり、周囲を見渡すと霧の中へと消えていく少女が見えた。

?この世界

?

家の中を引きずり回され、背中が痛くなってきた時にようやく彼女の手が離された。それと同時にドアがボタンと勢いよく開く音。

「さあ、外に出て。今はほら、もう太陽が輝いているわ」

「外……?」

ぼくと同じく引きずられてきたランドセルを背負って立ちあがると、そこはさっきの玄関と違って薄暗く狭い場所にドアがあった。たぶん裏口だろう。そして、彼女が言ったように本当に光が明るく差し込んでいた。

「え、でも、」

「大丈夫よ。もうさっきの子たちはいないわ」

そう言われて、おそろおそろドアから頭だけ出してみると、そこはこの家の庭みたいなところだった。芝生があって、いくつもの木が生えていて。だけど、なぜか柵が見えない。他の家も見えず、ずっと向こうまで庭が広がっているように見える。その時、何かかぼく頭に振りかかった。ぎよっとして上を向くとさらさらと雫が落ちてくる。「え? え?」と騒ぐそんなぼくの様子が何かおかしかったのか彼女はくすりと笑った。

「天気雨よ」

「天気雨？」

「そう。本で読んだことあるわ。晴れているのに雨が降ってくるの」

彼女は雨も気にせず外に出ると片手を広げてみせた。

「でも、すぐにやむわ。気にせず行きましょう。それとも、また手をつないでいく？」

ぶんぶんと首を横に振る。いくら子供だと言ったって、もう小学五年生だ。そんな小さな子みたいにされたくないし……そもそも恥ずかしいし。

「じゃあ、早く行きましょう」

彼女はそう言うといきなり向こうへとかけ出した。あわてて、ぼくも追いかける。

外に出ると、ぱらぱらとしたこまかい雨はまるで降り注ぐシャワーのようだ。それを浴びた草木はきらきらと光ってぼくの目にうつる。空は晴れ渡っていて、空気もすがすがしい。どこかで鳥の鳴く声が聞こえる。くつの中の草の感触がどこかなつかしい。ずっと昔、幼稚園にいた時にも、こんなふうにして走ったことがある気がする。

「ふ、ふふふ」

彼女の笑う声が聞こえた。前を向くと彼女の足はかるやかで踊るようにして野原を回る。白い服装がひるがえって、とてもきれいだ。雨が光って、彼女を照らす。

「何が面白いの？」

追いかけながらそう聞くと、彼女は一度振り返って、

「こうしていること、そしてここにいる全てよ。ほら、ぼくも感じるでしょう？」

「感じる……？」

確かになつかしくはあるけれど。走りながらあたりを見回すと、ただ自然があふれているだけにしか思えない。

「ふふ、それが全てなの」

彼女は速度を落として、また振り向いた。後ろ向きに歩きながらぼくを見て微笑む。それを見て、ぼくは一瞬くらっとした。

「もう少し行ったらわかるかしら。そうね、ちょっと小高い丘がそこにあるわ。その上から二人で下を眺めてみましょう」

そして、細い腕を伸ばして先を指さす。そこには、丘のようにもりあがったところがあった。二本の木が立っていて、両方の枝の上に丸太がいかだのように結ばれた床がある。数分もせずにはぼくと彼女は一番高い所へと辿りつき、木にかかっていたはしごを登ってみた。それは意外に頑丈でぼくたち二人が乗っても全然ゆれない。

彼女が木の床から足だけ投げ出して座る。その隣をぼんぼんとたいてぼくに顔を上げた。座れることなんだけど、そうしてみる
と正直、さっきよりもなぜかときまぎして落ちつかない。一体どう

してだろう。

「ねえ、ぼくはこれを見てどう思う？」

「え？」

もじもじとしたまま辺りを見回す。

「風景よ、ここから見える」

「え、えーと。大きな庭だなあ」

少しだけ棒読みになった。でも、ここからは本当に庭の様子がよくわかる。さつき走ってきた草原や、向こうの林も見えた。さつきは気付かなかったけれど、ここはずっと緩やかな坂になっているようだ。

「本当に自然に囲まれてると思う」

「そうね。でも、それだけ？」

それにうなずくこととして……ぼくは首をかしげた。彼女が何を言いたいのか、それが他にあることはわかるのにそれが何かはわからない。

「そう……それはね、世界は美しいってことよ」

「美しい？」

「ぼくにはまだ早かったかしら」

早かったわけじゃない。ただ、そんなことは子供のぼくだって、よく聞く話だった。世界はきれいだ、かがやいている……特に命あるものは、なんてことをどこかで聞いた。けれど、

「ぼくにはそう思えない。世界がかがやいているのは表面だけだよ」

「どうして、そう思うの？」

「中身は汚い。ぼくが過こしてきた世界はずっとそうだった」

「だから、わからないの？」

「うん。だって、ぼくは生きてて楽しくなかった」

半分だけのはがれたかわいそうなニコニコシールを見て、シールを上からおさえるようにしてなぞりながらぼくは言った。

「いじめられている今もそうだけど、たといじめがなくなってもあいつらがぼくを見る視線は変わらないんだ。去年だっていろいろあって、先生が手を打ってくれたりしたけど、その時にはいじめはなくなってもそれだけだった。だれもぼくに声をかけてくれる子はいなかった。本当に今までの生活からいじめだけ抜いただけだったんだよ。あいつらも今でもぼくのこときらいだろうし、中身は同じなんだ」

そうして、一旦息をついて、

「世界は決して美しくないんだ」

冷たい風が吹く。夏なのに暖かくない。少しだけ沈黙が降りた。

「そう……じゃあ、ぼくがそう思うのも無理ないわね」

彼女はさびしそうな眼をしてため息をついた。

「ぼくも外側だけはきれいになったのにな」

「え？」

言われて見ると、さっきまで服や体についていた泥はあとかたもなく消えていた。さっきの雨に濡れて落ちたのかもしれない。不思議だなあと思っただけで、その時なぜか急に視界がぼんやりとしてあわてて頭を振った。

「どうしたの？」

「なんでもない」

なぜだろう。ねむくなったりわけじゃないのに。なぜか今見ている風景がありえないものに見えてしまった。

そんなぼくの様子を気にせず、彼女は話を続けている。

「わたしには美しいと思える。ずーっと遠くまで」

「どこか外国へ旅行したこととかあるの？」

「ないわ。わたしはあの屋敷から出ないもの」

……出ない？ 再び変な感じがしたと思った時、突然彼女が立ちあがった。

「じゃあ、次は中よ！」

そう言って彼女はぼくの肩を叩いた。ぼかんとして見上げると、

「だって、せっかくここまで来たんだから、この世界が輝いてい
ることを知ってほしいわ」

「え……ええ？ せっかくって、ただ歩いてきただけなんだけど」

「わたしにとっては遠出なの」

胸をはって言われた。ちょっとおどろく。って、ぼくはどこまで
振り回されるんだろう。

「別に……いいけど、一体どうやって？」

すると、彼女は右手をかかげるポーズを作って、ぼくに笑いかけ
るよ、

「学校よ。学校に行って諸悪の根源を正せば、いいのよ」

そんなとんでもないことを言った。

?少女の疾走

?

少女は止まらない。むしろ声をかければかけるほど、さらに速度を増していく。

「ちょっと、どこへ!」

さっきと同じ林の中を駆け抜ける。霧は白く、けれど、そこまでは深くない。落ち葉を踏む音が二重にこだまし、視界を遮る枝の間から水色がはためく。それは女の子の着ているブラウスの色。くせのある髪も揺らして、僕が枝をかきわける間に彼女はどんどん姿を小さくしていく。

「なんてすばしっこいんだ」

僕の足はもう疲れて痛くなっている。今までずっと歩いてきたせいで。しかも、この林は屋敷の塀沿いからずっと坂になっているのか、余計に息が上がる。今、女の子が走っている先から歩いてきたはずなのに、さっきは気付きもしなかった。

と、その時。突然、音が途切れた。

「おっとと……」

眼の前の女の子が急にふらつとして、そのまま落ち葉の中へと飛び込んだ。木の根っこにでもつまずいたのかもしれない。だけど、転ぶ時に彼女はふらつきながら片足で一回転するように僕の方を向

くと、

「へへ」

そう不思議な笑みを見せてきた。子供らしいけれど整った顔立ち
それが眼を細め、まるで何かを試しているような、そんな表情
で。

「君は一体……？」

なんだろう、この雰囲気。明らかに変だけど、それ以前にこの感
覚を僕はどこかで感じた気がする。彼女が何かしているか……じゃ
なくて、姿、特に顔と服装……。

「あの、どこかで前に、」

「ん？」

彼女はぴよんと、そんな音が聞こえてきそうなくらいの勢いで立
ち上がると、そばの木を背にして僕と向かい合った。さすがに走っ
てきて疲れたのか、ふうと一息ついて口元をぬぐうと、

「49人目」

「え？」

そうなんでもないように僕に言った。まるで、やあ、とか、よあ、
とかそんな感じで挨拶するように。

その瞬間、

(せ！ お い、)

どこかから林の中を突きぬく声が聞こえた。

はっとしてあたりを見回す。けれど、どこにも人の姿はない。女の子を見ると、さつきと変わらず普通に立っている。ただ、僕のことを品定めするかのように見つめていることを除いて。

……よんじゅう……きゅう……？

今のは幻聴だったのか。だけど、女の子が言ったことは聞き間違いには思えない。

一体何なのか聞こうとした時、今度はまた別の声が聞こえた。

「綾奈！ こんなところに来てはいけないと何度も……、」

さつきのとは違い、ずつとはつきりした質感を持った男の声。女の子の奥の方、霧の中から足音を響かせて誰かがやってくる。僕は後ろへ下がって、すぐに枝をさが

いや、だめだ。思わず動かそうとした手を片手でおさえて、彼を待つ。今の僕は昔のぼくじゃない。

「綾奈……？」

霧から出てきたのは四十代くらいの男性だった。濃いグレーのシャツに、黒いズボンをはいた、ごく普通のおじさんだ。彼は僕を見るなり、はっとした顔になる。そして、なぜか気まずそうな顔をし

て黙り込んだ。

えっと……僕は何か変なことをしたんだろうか？

女の子だけがまた走るようにして、男性の後ろに隠れる。そして、ちらちらと彼の足下からのぞいてきた。その様子からすると何のフオーもしてくれそうにない。

気のせいか、さっきよりも霧が深くなっている。

「あ、あの……僕は別に怪しい人じゃないです。ただの中学生です」

「中学生……？」

視線だけをじろりと僕に向ける。けれど、威圧感は強くない。

「その女の子を誘拐するとか……そんなことはしないです」

「誘拐、ね……」

それでも男の顔は晴れないものの、何かに気付いたのか少し考える素振りを見せた。

「なら、あの屋敷の住人と関係は？」

「屋敷？ ないです。ぼくは隣の街の住人です」

「隣の街？」

うなずいて詳しく言うと、ようやく彼は僕を怪しい人物じゃない
と思ったのか表情を緩めた。

「なら、いいんだ……。娘を引き取りに来た連中じゃないなら、
それでいい。変なことを聞いてしま
って悪かったね」

「いえ……。あの、教えてください。あの屋敷は一体何なんですか
？」

「それは……」

再び息が詰まるような沈黙。彼は答えにくそうに再び視線をそら
すと、

「ただの森の中の家だよ……。住んでいる人は今はいるのかわから
ないが」

「それだけですか？」

「……君は嫌に聞くね。まさか見たのかい？ あれを」

……“あれ”？ 妙な気がしたのを無視し、ゆっくりとうなずい
て応える。すると、彼はあとため息
をつくと同情するように、

「あの家は古い家柄で、一体いつからそこにあつたのかわからな
いものだ。おそらく家の造りからして外から入ってきた者たちなん
だろうが……。けつじん 袈裟院けつじんという名字もこの国に来た時につけたものだ
ろう。昔は予言の館と言われていた。今もしていたとはしらなかつ

だが、君も見たとおりのものだ。今もいるのかい、あの女の子は？」

女の子……？ それは……誰だ。

「現在ののはるか遠くまで見渡し、遠い未来のことまで予言してみせる。どんなことも言い当ててみせる子だよ。会ったんじゃないのか？」

そんな子、僕は知らない。でも、待つて。なんで、この人はそれをそんなに恐ろしい眼をして語るんだ。

「それは……何か悪いことでもあるんですか？」

すると、男はかぶりを振った。

「悪くはないさ。だが、よくもない。私たちの住むような田舎ではむしろ怖いくらいだ。あれは祀ってもいい、崇めてもいい。そのくらいのもんだ。それに、」

過去に一体何があったのか、その男性は僕とまだ眼をあわせずに続ける。

「あれはまるで別の世界に迷い込んだようだ。見るんだよ、ぼんやりとした霧の中で、私が何をしていたのか、そして、何をするのかを」

こんな霧深い場所でさらにそんなものを見るなんて二重の恐怖じゃないか。そう彼は言った。

その後、二言三言話して僕は彼と別れた。最後の言葉はもう覚えてない。気付いたのは帰る時に女の子が僕を一度振り返ったことくら

いだ。

「そうか……」

屋敷へと元来た道を辿りながら、もう一度考える。

やっぱりこの屋敷には何かがあるんだ。それが僕が昔にあったことにも関係しているのは間違いない。記憶を思い出す手掛かりはその不思議な力にある。

「……それにしても遠くを見る、と未来を見る、か」

占い師が水晶玉をのぞくようにして、それを見たりするんだろうか。それとも巫女のように神託を授けられるのだろうか。それにしても、その二つの力には共通した要素がある。どちらも“遠い”。未来も同じだ。時間と距離の二つの面でそれらは遠く離れたところにある。

もう少しどうなっているのか知りたかったな。見たのは嘘だと言っ
て。もう遅いけど。

「あれ……、待てよ。過去も遠いけど……」

男性は何をしていたのかとも言った。それは過去を見る力のはずだ。でも、おかしいな。そんなにいくつも不思議な力があるものなのか？ 水晶玉一つにそんなにいくつも？

でも、これだけ聞いても見ない限り非現実としか思えない。まあ、現実なんて今は置いておくしかないけれど。だって、ここは、

ここは……？

はたと立ち止まる。今なんで僕はそんなことを思ったんだろう。歩いているこの場所は現実のはずなのに。

「現実じゃないわけが……ない」

たとえ異能力が登場しても、それは現実の中でのはずだ。ここまで来たことを朝起きた時から思い出してみるけれど、一度だって何かから外れてはいない。

幻を見たとしても、それは幻だ。

と、その時。今度こそ思考が止まった。

再び坂を下りて塀を曲がった先、正門の前に誰かがいた。それは白いブラウスを着た女の子。肩までかかる髪、目鼻の整ったきれいな容貌。彼女はぼんやりと僕の方を向くと、ふらつとした足取りでこっちに歩いてきた。その姿は服だけじゃなく手足も同じように白い。

僕は彼女を……知っている？

唐突にそんな思いが思考を突き破る。だけど、おかしい。片方の瞳には光が灯らず、何も見えてないように見える。歓迎するような素振りもない。そして、彼女は僕の前に立った。僕は 思わず、つばを飲み込んだ。

その姿はまるで幽霊か何かだ。

そして、彼女はふっと消え入りそうな笑顔を浮かべると言った。

「ようこそ、か……おの界へ」

？彼女の切り札

？

ぼんやりと目を開けると、ぼくはどこかの教室にいた。ぼくの学校じゃない、見たこともない教室。いつの間にか時間が経ったのか教室のカーテンの隙間から夕暮れ色の光が差し込んでいる。黒板の上の時計は午後の3時をさしていた。

「さて、みんな集まったわね」

彼女は教卓の前で楽しそうにそう言った。先生のように堂々と胸をはって、席についているぼくとその後ろを見渡す。つられてぼくも振り向くと、一列を空けて生徒が座っていた。そこにいたのは、
って、え？ ちよっと待って。

さっきぼくを泥の中に突き落としたあいつらが、なんでここにいるの？

目をこすってみるも状況は変わらない。あいつら3人はなぜか席について、めずらしく行儀よく座っている。普段は絶対にそんなことしないのに。なんだろう、このもやもやとした感じ……違和感？
なんかあいつらじゃないみたいだ。

って、そんなことはともかく状況が見えない。何があったか、すぐに思い出そうとするけれど、頭はまだぼんやりしている。ああもう、こんな時に！

「さて、それじゃあこれから」

そもそも、さっきの草原から一体どうやって、ここに来たんだっけ。あの後、木の上から下に降りて、それで……。だめだ、そこから全然思い出せない。まるで、あの場所からまっすぐ飛んできたみたいだ。そんなわけないんだけど。

「いい？ このゲームで、もしこの子が勝ったら」

もしかしてぼくはあの後眠ってしまったんだろうか。それなら、思い出せないのも頭がぼんやりしているのもわかる。夕暮れになっているのも時間の感覚がないからだ。

あれ？ でも、そうすると、ぼくはこの女の子に運ばれてきたの？ まさか背負われたとか

「もし君たちが勝ったら、この子を好きにしていいわ」

「へ？」

とんでもないことを考えた時にとんでもないことが聞こえた。はっとして、

「え、え！？ 一体何？ 何を？」

「どうしたの？ 顔、赤いけど」

「え、え……いや、そうじゃなくて」

思わずうつむいて、ふうーっと息を吐いた。今はどうやってここに来たかは忘れよう。そんなことより、ぼくがこれからとんでもな

いことになってしまふことの方だ！

「好きにするって何？ ぼく、聞いてないよ！」

「あら、聞いてなかったの？」

「おいおい、お前何してんだよ」

あいつらの一人から茶々が入った。突き刺すような言葉が耳に痛く響く。

「ま、お前なんか勝ち目なんか」

「黙りなさい」

教室に凜とした声が響いた。一瞬にして場が静かになる。彼女が3人の方を見てすつと目を細め、

「それはやってみなければわからないわ。それに、あなたたちが負けたら、もうこれ以上この子をいじめない約束よ。さっき言ったこと、わかっているわよね」

彼女はさらつと笑顔のまま、普段より冷たい声でそんなことを言うつてのけた。そして明らかに裏があるような顔でぼくに目配せにしてくる。なんだかよくわからないけれど、ぼくは彼女のその表情を見つめながら思った。一体何を始めようとしているのだろう。この人は、と。

彼女は3人がだまつたのに満足したのかうなずいて、教壇の中から大きめのケースと何か紙のようなものを取り出した。

「いい？ もう一度言うからよく聞いてね。これからあるゲームをするわ」

そう言っただけで彼女が見せたのは正方形の板みたいなもの。ボードゲームかと思っただけで違う。それはマス目のようにへこんでいる。ビンゴの紙を立体にしたものだと思うとわかりやすい。

「今からするのはマスを使ったポーカーよ」

そして、ポーカーって知ってる？ と聞いてきたけど、そんなの知らない。ぼくが知ってるのはババ抜きとか大貧民くらいだ。

「本当なら5×5で25マスあるんだけど、みんな初めてみたいだから3×3でやるわ。めずらしいけれど9マスポーカーも本当にあるのよ。ルールは簡単。同じマークと同じ数字、もしくはその両方を二つか三つそろえるの」

そう言っただけで、彼女はケースを開けて取り出したのは小さなチップ。と思いきや、その表面がランプになっている。辺が3センチくらいの正方形の中にマークと数字が書かれているんだ。彼女はそこから何枚か取り出して、ボードにはめてみせる。次にマスに数字が違えばチップとマークはバラバラに同じ数字だけを3列そろえたのをかかげて、ぼくたちに見せた。

「2枚で1ペア、3枚同じだったらスリーカードとこうしてそろえるの。すると、1点、2点入る」

次に1、2、3と数字をつなげるのをストレートで3点、ペアもふくめて同じマークにするとさらに1点加算されると言った。

「それをこの9マスでどれだけ点を増やせるか競うの。縦、横、斜めで重なってもいいの。わかった？ ちなみに本当はトランプ1セットだけど、数が多い方が面白いと思って特別に枚数を増やしてみたわ。本当はお金をかけたりするみたいんだけど、今回はお金じゃなくてぼくのこれからをかけてみたわ。だけど、心配しないで。お遊びだもの」

「いや、心配しないでって……」

心配しかないよ。お金とぼくのこれからって、これからの方がずっと重いじゃないか！ 負けたら終わりだ。それにこういう勝負ごとには、ぼくはとことん運がない。この前、さいころですごくやったら1か2しか出なかったんだから。

後ろを振り向けば、あいつらは誰が代表して勝負するか考えながらニヤニヤと笑っている。最悪だ。もう、おしまいだ。

「大丈夫よ、自分を信じなさい」

ぼくが自分でもわかるくらい真っ青な顔をしていたからだろう。

ぼくの手にそつと彼女の手が重なった。そして、耳元に小さな声で、「運がなくても、こういうものにはコツがあるの。絶対に負けな方法がね。それをこっそり教えてあげるから落ちついて深呼吸しなさい。そして、これから自分は一体何をするのかを見つめ直して言葉にして飲み込むのよ。ぼくならきつとできる」

そして、彼女はその方法をつぶやくようにして言い、勝負は始まった。

? 赤い学校

声を聞いた瞬間、ぶつりと視界が消滅した。まるでテレビの電源を落とすような流れ。反応する間もなく次の瞬間、視界は空に近い場所を映しだした。すぐ真上からゆつくりと迫る茜色の空。靄のよ
うな雲が薄く広がる、黄昏という名の夕暮れ。

見渡せば、ここは四方をフェンスで囲まれた灰色の床。長方形に伸びた打ちっぱなしのコンクリートは大して広くなく、フェンスを背にしたここから向こうまで10歩の距離もない。それが長く見えるのは、横の辺がそれよりずっと短いからだ。

ただ、そこにある何もかもが夕暮れに赤く染め上げられている。

「屋上……?」

ようやくはつとして、後ろを振り返る。けれど、何もない。そこにあるのは、フェンスの影が建物の端から消えているだけの寂しい光景だ。霧も林も屋敷も、さっきの景色なんてどこにもない。僕は自分一人だけここに飛ばされてきた、そう思えるほど異質で孤立だ。

「なんだ……そりゃ」

手を伸ばせばフェンスの冷たい鉄の感触がする。これに触れるということは視界だけが変になったわけじゃなさそうだ。なら、飛ばされたのは間違っていない。

僕はあの場所からここに運ばれてきたのか。いや、それだと時間と場所はどうなる? 僕の意識は鮮明について一分前のことを思い出

せる。体の姿勢も何も変わっていない。まさか時間も場所も乗り越えて本当に来てしまったっていいのか？

「って、言われてもな……」

きよろきよろともう一度見回してみる。

誰かこの状況を説明してほしい。現実非現実のことを考えてはいたけれど、いきなりすぎる。場面が飛ぶなら最初に言っしてほしい。

そう誰かにケチをつけていると、そうだ、あの女の子はどうなったんだろ。僕の目の前に現れたあの子は。さっき聞いた声はノイズ混じりでほとんど何も聞き取れてない。というより人間の声に思えない。あれはテレビの砂嵐の音によく似ていた。

フェンスから外を見てみるけれど、下には広い土色の地面が広がっているだけで女の子どころか誰もいない。って、ゴールのネットや白線が引いてあるところを見ると、ここは学校みたいだ。

だけど、僕の記憶にはない。ここに来たことはたぶん一度もない、知らない場所だ。

その時、ふと 声が聞こえた。

気のせいかと思うも、また聞こえる。下の方からだ。耳を澄ますと誰かが話しているようだ。フェンスにしがみついで、できるだけ下を見るとどこかの階の窓の外からカーテンがはためいている。そよそよと静かに風に揺られながら。

「一応行ってみるか……、ここにも仕方ないし」

その前に眼を閉じてみたけれど、開いた先は夕暮れ色で何も変わっていないかった。

降りる階段を見つけて、ゆっくりと昇降口の白い扉を開く。そして、音を出さないように螺旋の階段を下に降りていった。なぜ、音を出さないのかは僕でもわからない。ただ、そうしないといけないような気がしたただけだ。

一つ下の入り口。灰色のドアには非常口と白文字で書かれているけれど、ここじゃない。声はもっと下から聞こえた。

二つ下の入り口。ドアに向けて耳を澄ます。けれど、何の声もしない。

三つ下の入り口。耳を近づけると、今度は声が聞こえた。誰か女の子が話をしている声がさっきよりもずっと近くで聞こえてくる。

ドアノブに手を伸ばす。それを静かにつかみ、ひねると扉が開いた。ゆっくりと開き、眼だけで中を確認する。見えたのは廊下だ。けれど、明かりはつけられていない。右側に並ぶ教室のドアの窓から、夕暮れの光りが射しこんでいる。それだけがこの光源だ。真つ暗の廊下の窓には段ボール紙が貼られ、外から照らされた場所だけが赤い。

けれど、視線を先に向けると三つ目の教室は違った。光りが大きく廊下に差し込んでいる。わかった、扉だ。扉が開け放されているんだ。そして、声は、

「今から」

そこから聞こえた。女の子の、今まで聞こえていた声。

「この声は……」

何を言っているのかまでは聞こえないのに頭に響く。声音だけが、ずっと奥深くにまで届いて、何かを揺らす。これは 何だ。忘れていた記憶を必死で思い出すような感触。内側からじゃない、外からこじ開けるような違和感だ。これは、これは 何だ。

「うっ、く……」

震える手でドアを閉める。少し立てた音は気にしない。やかましいのは胸に響く心臓の鼓動。途端に響きだしたそれは次第に内側から僕の体を圧迫する。

ドクン、と。

落ちつけ。

足音を出さずに教室へと進む。一つ目の教室をよぎると声は次第にはつきりと聞こえ出す。教室には他にも誰かいるのか、かぼそい声が他にする。けれど、僕には女の子しか聞き取れない。話を聞こうとした時、その声は、

「どうしたの？」

「は
「！」

鼓動が一気に跳ね上がる。

教室からの声が僕を貫いた、気がした、その瞬間。

『ねえ、ぼくは』

砂嵐巻き散る映像が脳裏をよぎった。

遠い記憶、白黒色の景色、下から見上げる彼女の姿

「は、あ」

一瞬だった。一秒もなかった。ただし、その間に心は満身創痕へと変わっている。

体中をはねまくった鼓動は、最後に頭痛を起こさせ二重に僕を切り刻んだ。違和感？ 違う。それはもう違和感なんてものじゃない。痛烈な異物感。

胸に手を当て爪を立てる。けれど、止まらない。落ちつけ、なんて言葉は痛みにかき消されて届かない。

ただ、顔をあげる。その姿勢のまま、目指すべき教室を視界にとらえる。

止まらないなら行くだけだ。もう逃げ道なんて、ない。ここに来た時点で。

「く」

一歩ごと足を踏み出す度に、頭のそれはいつそうきつくなる。心

臓が鼓動しているのか、頭が割れそうな痛み悲鳴をあげているのか、もうわからない。

夕暮れの赤い光が僕を染め上げ、影に落とす。目的の教室はもう眼の前だ。

なのに！　なのに、それでも僕を貫き続けるのは、

声だ。

「　　黙りなさい」

いくつもの声が杭となり、僕の記憶野を打ち続ける。

黙れというなら、その声を黙らせてくれ。その声が僕の歩みを止めさせる。

彼女に、会えなくなる。

「　　今からするのは」

その声が、

「同じマークと同じ数字、もしくはその両方を二つか三つ」

声が、声が、

「さあ、始めましょう！」

心をつんざくその声が

ああああああああ！

眼の前が光りに真つ赤になった瞬間、遂に壊れた音がした。

頭の中、忘れ果てた記憶が突き破られ、赤い視界に走馬灯が走り抜ける。

白黒の景色も砂嵐も全てが押し流された。代わりにそこに現れたのは色鮮やかな光景。

緑の大地、白い少女、手を引かれる誰か、

彼女の笑顔

「は
」

思い、出した……

赤い視界がみるみる遠くなる。すぐそばに彼女がいるはずの教室は遠くなり、僕は暗闇へと投げだされた。

だけど、後悔も何もない。

何もかもが体のうちから抜けていく中、ただ手にした記憶だけをつかんで僕は眼を閉じた。体は落下の感覚に襲われている。このままずっと僕は落ちていくのだろう。全てが始まる場所へこれから行くんだろう。

ああ、これでようやく僕は。

彼女に、会える。

?それが全ての始まり

?

戦いは何事もなく進んだ。

結果として、勝負はなんとかなってしまった。つまり、勝ってしまっただ。

「ありえない……」

ぼくの前にはチップが9つはまったポーカーのボードがある。ス
ペードやダイヤがいくつもつながり、そのうえ数字も同じに重なっ
ている。一方、相手はペアはいくつか作れているけれど、数字やマ
ークがあわなかったりして、ちぐはぐな結果になっていた。

「こんなやつに……!」

彼はボードを投げ出し、ぼくをにらみつける。朝見た時よりも激
しい視線に思わずのけぞった。だけど、そこで、

「約束は約束だから」

ポーカーを片付けていた彼女がぼくたちの間に入ると、突然ぼく
と相手の手を取って無理矢理握手させた。しかも、ぶんぶん腕を
振って、

「いじめない、いじめない。今度から仲良くするのよ」

そう穏やかな笑顔で言う。けれど、あいつはそれを振りほどくと「帰るぞ！」と言うと他の二人に言うと、すぐに教室から出て行ってしまった。二人は「へ、え？」なんてポカンとして言った後、逃げるようにして走って行ってしまった。

後にはぼくと彼女だけが残される。彼女はそれを呆然として見送ると、ぼくに振り返って、どこか申し訳なさそうな顔で、

「やっぱり……変わらないのかな」

そう視線を下に落として言った。ぼくはそれに「うん………」としかこたえられない。だって、今までずっとそうだったから。そう簡単に普通に接するなんてできないんだ。でも、

「……ありがとう」

そうぼそつと言いたくなるくらいには彼女に感謝していたぼくがいる。

「なんでかわからないけど、ちょっとだけ強くなれる気がする」

「そう……そっか。なら、いいわ。それがわたしが一番思ってたほしかったことだもの」

彼女は目じりをぬぐうと、くすりと微笑んだ。

「それじゃあ、帰りましょうか」

「うん！」

その時、ぼくはやっとこの女の子のことが少しだけわかったような気がした。

学校の門を出ると、もうすっかり夜になっていた。きらきらと星が輝く夜空が見える。

「もうそろそろお別れのお時間ね」

「もう？　ぼくはまだ一日の半分しか経ってないように思う」

「それはぼくが子供だから。日が暮れるのも早く感じるの」

そう言って、またほほ笑む。けれど、ぼくはまた子供扱いされたのにむすつときた。

「じゃあ、お姉ちゃんはとうだったの？」

「わたし？　わたしは……うん、同じかもしれない。わたしは子供じゃないけれど、いつもは外に出ないからあつという間だった」

「どうして外に出ないの？」

「体が弱いから。昔は外に出れたんだけどね。わたしは今は部屋のカゴから外を見るだけよ」

「そうなの？」

今も出てるじゃん、そう言ったけれど、彼女は何も言わなかった。

「ほら、見て。あそこに何かあるわ」

指差した先を見ると、きらきらと輝くものがあつた。くるくると回転していて、一瞬ユーフォーか何かと思つたけれど、それはぼくも何度も見たことがあるやつだ。

「メリーゴーランドだ」

「なつかしい。最後に乗っていきましょう」

そして、また彼女は走り出した。今度は一人じゃなく自然にぼくの手をつないで。また引つ張られるぼくは今度はいやとは思わなかつた。

遊園地もない、ただっ広い荒れ地の真ん中にメリーゴーランドが光り輝いて回っている。それに誰も乗っている人はいない。誰も見ている人もいない。彼女が近づくとちょうど待っていたかのように、馬が眼の前で止まつた。

「さあ、ぼくが前に乗るといいわ。わたしはその後ろ」

そう言つて、背が小さいせいで一人で乗れないぼくを両手で持ち上げると馬の首あたりに乗せてくれた。続いて彼女が乗るとすぐにまた動き出す。どこからか聞こえてきた小さなメロディに乗せて、ゆらゆらと馬がゆれる。それはとてもいごちがいい。後ろに座る彼女の暖かさがあつたからかもしれない。それはどこか 安心で きるぬくもり。

「ねえ、ぼくは今日一日わたしと過ごしてどうだった？」

「よかったよ」

前を見ながら、ぼくはこたえる。くるくると同じ風景が回っていき。

「世界はどう？ 美しいって思えた？」

「うーん……わかんない」

すると、やさしく背中を弾かれた。

「こういう時はうそでもいいから美しいって言うの。本に書いてあったんだから」

「えー、知らないよそんなの。あ……でも、」

そこでぼくは馬の頭にほおを寄せるようにして言った。

「前より……いいかな。きれいかは今度教えるよ。それまで考えてとくから」

「そう。それはよかった。うれしいわ」

頭をなでられる。ぼくは顔が赤くなった。

「あ、そうだ。そういえば、名前聞いてなかったんだけど、よかったら教えて」

そう言って振り向いたとたん、

彼女の姿はなかった。

「え？」

馬がきーこきーことかすれた音をたてる。後ろにはポーカーのボードが一枚、チップと一緒に置いてあるだけだった。他に周りを見ても誰の姿もない。落ちたんじゃないかと思つて、下をのぞいても何も無い。

「お姉ちゃん？」

呼んでみる。だけど、小さくなっていくメロディ以外には何も聞こえない。そして、しばらくもたたずにメリーゴーランドは止まった。音が完全に消え、馬が動かなくなる。ぼくが下に降りた瞬間に、電気が消えた。

真つ暗になった。

何も見えない。どこを歩けばいいのかもわからない。何の音も無い。

「お姉ちゃんー！」

パニックになってぼくは無我夢中でかけた。呼びかけながら、けれど、返事がない。何度も何度も呼んでみるけれど、何も返ってこない。

と、その時、またつまずいた。

「いてえ……」

また涙で目がにじむけど、もう気にしてられない。そういえば、さっきも転んですりむいたんだ。こんなの、どうってことない。どうってこと……、

「……………」

足をさわろうとした瞬間、感覚が消えていることに気付いた。傷がなくなっているんじゃない。ただ、さわれない。そして、そう思うと今度は足が、手が、全ての感覚がなくなっている。うそだと思っただ瞬間、

『もう君は帰りなさい』

頭に直接響く声があった。どこから聞こえてきたかわからない。けれど、思わず真上を見上げた。そこにあるのは闇で、何も変わらないけれど気のせいかさつきよりもよく声を通る。

『あの子も帰った。もうそこにはいない。なぜなら、私が連れ戻したんだ。君も行くんだ』

いやだ、と全力で応える。でも、声には出来ず、頭の中だけで叫ぶだけになった。それでも相手には聞こえたのか腹をたてたみたいだった。突然、語気が強くなる。

『いい加減にしまえ。もともと君の方がこの世界に迷い込んだんだ。力を抜き、眠るように去れ。そして、忘れてくれ。今まであったことは全部。むろん、娘のことも。だが、娘は覚えているだろう。それだけでいい。な？』

いやだ。絶対にしないと叫ぶ。ぼくは彼女を探して、また会いに行く！

その瞬間、彼女の笑顔が　そしてぼくを連れ回す姿が浮かんだ。消えたはずの手の感触がよみがえる。固く固くその手を握りしめる。

そうだ、ぼくは彼女のことを　、

『　あの子はもう走ることすらできないというのに……！』

声の反響が止まったその時、ぎしりという音が顔の真下から聞こえた。とっさに視線を下に、いやだめだ。首が動かない。だれかに、両手で首をしめ

「いた、い」

思考が止まる。苦しい。手をはなせ。息が、できない。

体をそらし、自分の手を前へと伸ばす。かすむ眼の前は真っ暗だ。誰の姿も見えない。けれど、いるはずだ。彼女をさらったやつが。ゆるさない。でも、その前に手をどける。

もがき続け、手を振りあげる。しめつける相手からはなれようと、だけど、届かない。振り乱す。届かない。ついに手は空をつかんで、だらりと下がる。動かない。もう動かない。

だめだ。死んでしまう。助けて、お姉ちゃ

「帰らないよ」

その瞬間、また別の声が聞こえた。いきなりぼくを苦しめていた空気がほどかれていく。だけど、目が開けられない。ただ、大量の空気がごうごうとうなりをあげ始めたのが聞こえる。

「ぼくは僕に帰る。もうこれ以上、こんな夢の醒め方はしないよ
うに」

空気の流れがどこか一点に流れていき、そこから白い光がさした。そこに誰かがいる。知らない人だ。だけど、なぜかその声は聞いたことがある。

「そして、忘れることも会えないなんてことも否定する。誰にもそんなことを決められない。それを決めるのは僕だけだ。断じて、あなたじゃない。さあ、」

そこで、やっと目を開く。それと同時に彼がぼくの方を向いた。知っている顔。だけど、少し違う成長した誰か。彼は少しだけ表情をゆるめると何かを言った。光と風の奔流の中、見えないはずのくちびるの動きまでもがぼくの中に伝わった。

わかった。ぼくはうなずいた。

まかせよ。

ああ、任せてくれ。

そう言って、彼が手を差し出し、ぼくはそれをつかんだ。一気に流れが加速し、一点に集中する。その瞬間、飲み込まれるような衝

撃に襲われ、ほくも彼も全てを包みこんだ。

そうして、視界がきれいな光りに満たされ、暖かい色へと変わる。うつすら眼を開けた後に現れたのは薄暗い小さな部屋。そこは広く豪華なシャンデリアが橙色を灯している。そして、ちょうどその下に位置するテーブルに誰か男が座っていた。

「なんだと……？」

そう言った相手は40代後半から50代の初老の男。薄い銀色の髭をたくわえ、時代錯誤の貴族を感じさせる。彼は僕を前にして眼を見開き、驚きにのけぞっていた。

「お前は……！ あの時の少年、いや違う。今の少年か！」

「そうだよ。あれから二年後の僕だ」

そして、僕は起き上り、一礼して改めて自己紹介した。

「僕の名前は榎崎渡。まだ中学生になったばかりだけど、あの時の僕とは違う。娘さんに会いに来ましたよ、お父さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6416z/>

青い月の下で：夢幻螺旋

2011年12月29日11時04分発行